

内的世界の冒険者たち (三)

— 石川啄木 —

歌人石川啄木にふさわしい言葉は、漂泊の一語であろうか。啄木が生きた二十六年と二ヶ月の日々は、追われるようにその住まいを転々とすることを余儀なくされた日々であった。ふるさと岩手から北海道へ、北海道では一年にもみたくない短時日の中で函館、札幌、小樽、釧路と転居をつづけ、東京へと向かっていた。啄木は、住まいにおいては決して安住の地を獲得することのできる日々はなかったといえよう。それゆえ、啄木の一生は漂泊の時を刻む以外の何ものでもなかったといえるであろう。しかし、本稿では、啄木における「漂泊の日々」を、たんに新たな住まいを求めて漂泊する姿においてではなく、投錨する錨をもつこともなく自らの人生を一つの運命・宿命と直視する日々として考えてみたい。そこに、石川啄木という一人の人間の実存する思想を明らかにしたいと思う。

菅野孝彦

流浪する日々

— ふるさと —

石川啄木は、本名「一（はじめ）」として明治十九（一八八六）年二月二十日、岩手県南岩手郡日戸村曹洞宗日照山常光寺に生まれた⁽¹⁾。父は同寺二十二世住職石川一禎、母は南部藩士工藤条作常房の末娘かつであった。啄木は第三子の長男として生まれ、長女さだと次女とらの二人の姉がいた。便宜的であるが、父が曹洞宗の僧籍にあるということから、啄木は、小学二年生の秋に父母の戸籍が統一されるまで、母の籍に入れられていた。このため、父一禎の喪子にほかならないのであるが、戸籍上、啄木は父の養子となる。啄木が一歳になる翌年明治二十年三月、父が北岩手郡洪民村の宝徳寺住職に転出し、一家も洪民村に転住した。啄木にとつての故郷が洪民の地となるのは、こうした経緯を背景としていえる。

明治二十八年洪民尋常小学校、明治三十一年親元を離れ盛岡市

内に寄留し通学した盛岡高等小学校をいずれも優秀な成績で卒業した。当時の成績は善、能、可、未、否の五段階で評価されるが、啄木は「学業善、行状善、認定善」を獲得し修了している。同年四月、盛岡尋常中学校に一二八名中十番の成績で入学する。第一学年は平均八十点、一三一名中二十五番の成績で修了した。第二学年は平均七十五点、百四十名中四六番となり学業は低下した。第三学年は平均七十点、一三五名中八六番の成績であった。第四学年は平均六六点、一一九名中八二番の成績となった。第四学年の最終試験で、啄木は不正行為をはたらいたとして譴責処分が付されている。第五学年に進級したが、一学期末試験において不正行為をはたらいたとして前学期に続き譴責処分を受け、保証人が召還される事態となった^②。なお、この学期の啄木の成績は、修身・作文・図画・代数が成績不成立、英語訳解三九点・英文法三八点・歴史三九点・動物三三点が不合格科目であった。さらに出席一〇四時間に対し欠席時数二〇七時間と、学業に関しては惨憺たる状況であり、落第を免れない状態にあった。この後、啄木は十月二十七日「家事上の或る都合」との退学願を提出し、卒業年次半ばで退学することとなる。

この間、中学校退学の月に刊行された『明星』第三巻第五号に、はじめて短歌「血に染めし歌をわが世のなごりにてさすらひここに野に叫ぶ秋」が掲載された。『明星』への短歌の掲載、盛岡中学校退学の中で、十月三十一日啄木は、文学でもって身を立てる

べく盛岡より上京の途につく。東京では、中学の先輩たちの厚意を受けることができたが、身を立てるまでには至ることなく、十一月下旬には高熱を發し病床に伏すことになってしまふ。明けて明治三十六年二月二十七日、体調不良の啄木は、上京した父に迎えられ洪民村に帰郷する。ちょうど十八歳となっていた。この啄木の第一次上京は、与謝野鉄幹・晶子夫妻や新詩社同人たちとの出会いという成果は認められるにしても、文学で身を立てるという点では、まだ遠く及ばないかたちで終わった。上京での日々について、「殆ど回顧の涙と俗事の繁忙」^③に追われる日々であったと回顧している。

洪民での静養のかがあつてか、啄木は健康を回復し翌明治三十七年にかけて、『明星』だけでなく『岩手日報』『時代思潮』『太陽』などに相次いで作品が掲載、發表されるようになった。第一次上京からちょうど一年を経て、啄木は、自らの詩集刊行を企図し東京へ向かう。もちろん、出版を企図したとしても容易に出版できるものではない。啄木においても例外ではなく、この第二次上京の成果となる処女詩集『あこがれ』もようやく出版にこぎつけた産物にほかならない。一番の難題は、出版資金の準備であった。出版資金三百円を拠出してくれたのは、洪民小学校の同級生であつた小田島真平とその長兄嘉兵衛、弟尚三の兄弟たちであつた。難産の末、明治三十八年五月詩集『あこがれ』は出版された。『帝国文学』『太陽』などの批評に取りあげられ若き詩

人の登場と祝されたが、商業的には失敗に終わり、ほとんどが啄木の元に返却されるありさまであった⁽⁴⁾。

時間が前後するが、啄木が『あこがれ』の出版に奔走していたさなかに、啄木自身の転換点ともなる出来事が起こっていた。それは、明治三十七年十二月の曹洞宗宗務院による父一禎の住職罷免の処分であった。父一禎のもとに、「岩手郡渋民村四等法地宝徳寺住職石川一禎儀去ル明治三十七年十二月二十六日宗費怠納ノ為住職罷免ノ御処分ヲ受ケ候」との書面が届いた。これは、本来すでに本山に納めるべき百十三円余の未納をとがめるものであった。一禎は、啄木の二度の上京に対する出費に宗費を当てていたと思われる。啄木が有名になれば、その分は返すことができる⁽⁵⁾。一禎の迷惑をこえて急で厳正であったのである⁽⁶⁾。一家はこの後宝徳寺を去り、渋民村別所に転居する。この結果は、石川家にとつての、ひいては啄木自身にとつての生活基盤を根こそぎ奪いとってしまったといっても過言ではあるまい。啄木が父の住職罷免の事実・一家の宝徳寺退去の事実を知るのは、明くる明治三十八年三月に受け取った父一禎からの便りであった。事実を知らされていなかったからとはいえ、渋民村での石川家を取りまく未曾有の事態の中で、東京にいる啄木は『あこがれ』の出版実現に没頭し、あるうことか生活費の無心さえていた、無心してしまっていたのである。

この明治三十八年、啄木二十歳の年は、啄木にとつて別の意味でも転機となる年であった。かねて婚約していた堀合節子との婚姻である。結婚の届は、父一禎が盛岡市役所に提出し、五月三十日に盛岡で挙式、披露宴が行われる運びであった。だが、啄木は、東京を出発したにもかかわらず仙台に立ち寄り滞在し、三十日の挙式、披露宴は新郎不在のままでとり行われるという、まったく支離滅裂ともいえる行動をとるのである。啄木は、この後六月四日に盛岡の新居へ到着し、啄木夫婦・両親・妹光子との生活が始まる。その後、盛岡での生活は、雑誌『小天地』の刊行・失敗もあり、九ヶ月あまりで終わりをつける。困窮する生活の中、啄木は渋民村の代用教員の職に就き、妻節子と母かつとともに渋民へと帰ることになる。父は義兄が住職をつとめる青森県野辺地にある常光寺に向かい、妹光子は通学する盛岡女学校の寄宿舎に入った。

渋民での住まいは、六畳一間であった。代用教員の給与は一ヶ月八円で、校長が十八円、勤続三十年の教師が十四円であり、啄木の給与は著しく低いといったものではなかった。しかし、母・妻・やがて生まれてくる子どもでの生活は、非常に厳しいものとなることが予測された。四月からの小学校勤務を前に、三月二十三日父一禎に対する「懲戒赦免の恩典」が通告され、一禎も渋民村に帰って来ることとなった。しかし、懲戒赦免が発令されたにもかかわらず、一禎の宝徳寺住職復帰は容易にはかなわなかつ

た。渋民村では、一禎が宝徳寺を退去した後、下閉伊郡船越村海蔵寺の徒弟中村義寛が代務住職として寺務一切を取り扱っていたため、檀家総代名をもって中村代務住職の住職跡目願書が前年

明治三十八年十一月に岩手県第一宗務所長に提出されていたからである。そこに、前住職石川一禎の懲戒赦免が発令されたので、跡目願は撤回されることとなったが、その結果、檀家間に前住職派と代務住職派との対立、住職の地位をめぐる村の有力者間の対立、さらには啄木に対する追い出し工作の展開と村全体を巻き込む騒動と化してしまふのである⁶⁾。一禎は、一年あまりの抗争に堪えきれなくなり、宝徳寺住職への復帰を断念し、啄木や檀家に無断で野辺地の常光寺へ戻ってしまった。こうして、父一禎の再任運動は幕を閉じることになる。啄木は、反一禎派の小学校校長排斥のストライキを煽動したとして、明治四十年四月代用教員免職の辞令を受けた。これが、ふるさと渋民村を去るに至る経緯であるが、啄木は渋民の地を去る思いを『一握の砂』に収められた

石をもて追はるることく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし

において歌う。ここには、村を去ることは人々とのあつれきによるものであり、啄木にとつての本意でないことが詠まれていると

思われる。

― 函館 ―

ふるさとを失ったこの時から、啄木の真の漂泊・流浪の日々が始まる。妻と前年十二月に生まれた娘京子は妻の盛岡の実家に、母は渋民村の知人宅に、父は野辺地の定光寺に、妹光子は、盛岡女学校を退学し小樽駅長をしている義兄にそれぞれ世話になり、啄木自身は北海道の地での再起を目指すことになる。まさしく、一家離散の図である。啄木は、明治四十年五月函館に向かい、文学愛好の士である「苜蓿社（ぼくしゅくしゃ）」同人たちに迎えられる青柳町四十五番地に下宿を始める。その後、文芸雑誌「紅苜蓿（べにうまごやし）」の編集に従事しつつ、月給十二円の小学校代用教員となり、函館の地で再び家族がそろふことになる。さらに、妻節子の妹ふき子の夫となる宮崎郁雨に「函館日々新聞」の遊軍記者職（月給十五円）を紹介される。代用教員を辞すことなく八月十八日に入社し、さっそく文壇・歌壇の企画を始めるのであるが、一週間もたたない八月二十五日に、函館は、自らの住まいへの延焼を免れたとはいえ、職場である弥生小学校も「函館日々新聞」もふくめ一万五千戸が焼き尽くされる大火に襲われてしまう。これによって、ようやく手にすることができかに見えた安定した生活の基盤が、その手からこぼれ落ちてしまったのである。

― 札幌 小樽 釧路 ―

この大火の後、啄木は雑誌同人から「北門新報社」校正係の職を紹介され、九月十三日失意のなか單身函館から札幌へと向かった。出社早々、同新聞社に勤務していた岩手出身の小国露堂の薦めで、席を暖めるまもなく二週間後には、小樽に創刊される「小樽日報」へと小国とともに転出する。小樽には函館に残した家族もよび、新生活が始まった。しかし、それもつかの間、十二月には啄木をよく思わない事務長に暴力を振るわれ、「小樽日報」を去ることになる（この時、給与は二十五円）。無職となり窮乏のまま新年を迎えるが、日報社社長のはからいで、明治四十一年一月二十二日に編集長格で「釧路新聞社」に入社する（給与三十円）。釧路へは、家族を小樽に残した單身赴任であった。釧路では、新企画を起こし、一ヶ月もしないうちに競争他紙を圧倒するほどの紙数になっていた。それと並行するかのようになり、啄木は酒色に溺れる自堕落な世界へも足を踏み入れることになる。啄木自身もそうした自分を反省し、以下のように日記（二月二十九日）に記している。

「釧路へ来て茲に四十日。新聞の為には随分尽くして居るものの、本を手にした事は一度もない。此月の雑誌など、来た儘でまだ手をも触れぬ。生まれて初めて、酒に親しむ事だけは覚えた。盃二つで赤くなった自分が、僅か四十日間の間に一人前飲める程になった。芸者といふ者に近づいて見たのも生れて以来此釧路が

初めてだ。之を思ふと、何といふ事はなく心に淋しい影がさす。」節操がない、変わり身が早いといわれるほどのすばやい決断で、啄木は、創作生活へのあこがれと野心をもつて釧路を離れ上京することを決意する。三月二十八日の日記には、「自分の心は決した。啄木釧路を去るべし、正に去るべし。」とある。四月五日、海路で釧路を出発し函館へ向かった。啄木は、一年にもみたない北海道での彷徨と流浪の日々を「函館の百二十余日、札幌の二週日、小樽の百十日、釧路の七旬余」（四月十七日小笠原謙吉宛書簡）と振り返っている。函館から退職届が出され、四月二十五日の釧路新聞紙上に啄木退社の報が告示された。四月二十八日、家族を函館に残し海路上京する。啄木にとつて、第二次の上京であり、執念を賭けた最後の上京であった。

― 東京 ―

上京後『菊池君』『病院の窓』などの作品を精力的に書き上げ、森鷗外に出版社への紹介を懇請するなど小説の売り込みに奔走するが、ことごとく失敗し呻吟する日々を送ることになる。そんな中、新詩社同人で毎日新聞に勤務する栗原古城の尽力により、毎日新聞紙上への十一月一日から十二月三十日まで『島影』六十回の連載が決まり、稿料六十円を受け取る。大金を手にしたとはいえ、啄木は、北海道にいる家族の存在も眼中にないかのようになり、貯えをすることもなく、浪費と酒色に散財するのであった。

翌明治四十二年二月、岩手出身の朝日新聞社編集長佐藤眞一を訪ね就職についての確約を得る、啄木は、三月一日より校正係として出社することになった。校正係の給与は、基本給与二十五円と夜勤（夜半までの勤務）一回一円で、月三十円の収入が予定されていた。当時の小学校教員や巡査の初任給が十二円、大卒銀行員の初任給が二十円、都内の三部屋台所付きの戸建て家賃三円の時代であり、啄木の経済は潤沢とはいえないまでも、十分に家族を上京させることが可能な状況にはあった。同じ時期、島崎藤村は月収二十円そこそこで、金田一京助は三省堂の給与三十円、國學院の非常勤職五円という収入で生活していた¹⁾。ところが、啄木は、経済的に十分安定した職を得たにもかかわらず、社からの前借り、友人らかの寸借した金で酒色に溺れ、散財する日々を過ごしていたのである。

東京で啄木が家族とともに生活を始めるのは、六月十六日であった。妻と娘と母との四人暮らしである。十二月には父一禎も野辺地から上京し、久しぶりの一家五人の生活となった。明治四十三年も、啄木にとってさまざまな出来事の年であった。社内的には、四月に二葉亭四迷全集刊行の担当者を引き継ぎ、九月には朝日歌壇がもうけられ啄木が歌壇の選者に抜擢されている。個人的には、十月四日長男眞一が生まれるも二十四日の命に終わるという不幸にみまわれていた。啄木は、「生まれて虚弱、生くること僅かに二十四日にして同月二十七日夜十二時過ぐる数分にして

死す。恰も予夜勤に当り、帰り来れば今まさに絶息したるのみ所なりき。医者注射の効なく、体温曉に残れり。」（明治四十四年当用日記補遺）と記している。また、処女歌集『一握の砂』の出版契約が、長男眞一誕生の日に成立していた。稿料は二十円であった。歌集名は初め『仕事の後』とされていたが、契約成立直後に『一握の砂』に変更されていた。さらに一気呵成に、啄木は、元原稿から四十首あまりを削り新たに八十首を追加し、一行表記を三行表記にし、漢字にはすべてにルビを振ることにした。偶然とはいえ、長男葬儀の日に長男が姿を変えたかのように『一握の砂』の組見本が啄木のもとに届けられていた。この他、啄木は六月に起こった「大逆事件」に強い衝撃を受け、社会主義関係の書籍に関心を深める。翌年一月三日に新詩社の同人であった弁護士平出修を訪ね、幸徳秋水が担当弁護士に送った陳弁書を借用し筆写した。啄木は、「大逆事件」の十二名の死刑執行がなされた後、平出修宅で十七冊の裁判書類中初めの二冊と管野すがに関する部分を読むことができた。

明治四十四年二月になると啄木は体調をくずし、病院での診察の結果、慢性腹膜炎と診断され入院後手術を受ける。三月半ばに退院するが、病状は決して快方へ向かうものではなかった。まわりの人々の援助が求められる状況であったにもかかわらず、啄木は、六月には妻の実家である堀合家と妻の帰省をめぐりトラブルが起こり、堀合家に対し絶縁の宣告を行っている。九月には、妻

への為替入りの匿名の手紙をめぐって、義弟でありそれまで物心両面から啄木一家への多大な援助惜しむことのなかった宮崎郁雨とも義絶することとなってしまった。七月には妻節子が肺炎カタルと診断され、娘京子を除き、床に伏す啄木、咯血する母と家中が全滅状態のありさまであった。この状況は、明治四十五年を迎えても変わらなかった、むしろ悪化の一途をたどったといえるかもしれない。「私の家は病人の家だ。どれもこれも不愉快な顔した病人の家だ。」（一月十九日日記）という啄木の言葉がすべてを物語っている。母は、咯血だけでなく吐血も伴い床に伏したままとなり、三月七日死去した。六十六歳であった。母の葬儀を終えると、啄木の体力・気力双方が急激に衰えていった。日記は、すでに二月二十日の記述で終わっていた⁽⁸⁾。啄木による最後の書簡は、代筆してもらった三月二十二日妹光子宛のものであった⁽⁹⁾。

こうした中、土岐哀果の奔走により『握の砂』を刊行した東雲堂書店と第二歌集『悲しき玩具』出版の契約を結ぶことができた⁽¹⁰⁾。土岐は、啄木に稿料二十円とともにこの第二歌集出版契約の吉報を届けることが出来たのである。『悲しき玩具』の刊行は六月二十日になされるが、それをまたずして母の後を追うように、母の死後一月余りの四月十三日、石川啄木は二十六年の時の流れに幕を引いたのであった。

啄木の死後、同年六月妻節子は結核療養のため房州北条町に向

かい、その地で女兒を出産し、房江と名づけた。その後、節子は、二人の遺児とともに実家のある函館に帰り借家住まいを始めたが、一年たらずして大正二年五月五日帰らぬ人となる。二十七歳であった。啄木夫妻の長女京子は、新聞記者の須貝正雄（婚姻後、石川姓）と結婚し、一男一女をもうける。正雄上京時に京子と啄木夫妻の次女房江も同行したが、京子は急性肺炎により二十三歳で死去し、姉の後を追うかのように妹房江もその二週間後十八歳で死去している。

啄木における実存する思想

啄木の足跡からも明らかのように、啄木の内的世界には大きな転換点を見ることができよう。それは、父一禎の住職罷免の事態であった。啄木自身の失態による中学校退学の憂き目にあうといった出来事もあるが、それは上京し自らの文学における可能性を試すという点では、ある意味啄木にとって益のあることといえるかもしれない。しかし、父の住職罷免という出来事は、啄木自身は言うに及ばず石川家全員が生きていくための経済基盤の喪失を意味し、裕福といえないまでも安定したそれまでの生活から放り出され路頭に迷うことにほかならなかったのである。

明らかに、父の住職罷免を境に啄木の作調は変わっていく。父の罷免以前に発表された『明星』その他諸誌に掲載された作品か

ら詩集『あこがれ』⁽¹¹⁾までは、明確な線を引けるものではないが、洪民の地に育った天真爛漫な啄木の才能が開花した時代であったといえよう。この時期の啄木は、自らの感情の高まり、高揚感を歌いあげていた。その根柢には、「高尚なる感情は高尚なる人格を形造る高尚なる愛の一念は人生の最高貴なる価値也。詩人の立脚地も亦ここにあり。最高の意志は最高の感情を伴う、これわが詩論也……」(明治三十七年八月三日伊藤桂一郎宛書簡)といった考えがあり、自らの才能に絶大の自信をもち自らの才能を進らせるかのように歌うことができたのである。「理想と現実の……乖離破綻のあればある程、力も勇みもいや更に強くなり候。」

(同年十二月十四日姉崎嘲風宛書簡)。

しかし、こうした状況が父の住職罷免とともに一転する。啄木は父の罷免を知り、先輩であり生涯の友である金田一京助宛に書いている。「兄よ、天下に小生の恐るべき敵は唯一有之候。それは実に生活の条件そのものに候。生活の条件は第一に金力に候。小生は金の一語をきく毎に云ひ難き厭悪と恐怖を感じ中候。小生は少なくとも悪人には無之候。然もただこの金の為に、否金のなき為、貧なる為に、親に不幸の子となり、友に不義の子と相成るにて候。茫々たる未来の事を思う毎に小生はまづこの恐るべき敵に切齒せざるをえず候。」(明治三十八年四月十一日書簡)「小生は人の如く笑ひもし、高く談りもす。然れどもその言葉、その笑い、それらは、ああ、常に空虚ならざる笑いなりや、言葉なりや」

(同書簡)と、これまで通りには笑うことも、語らうこともできない自分の姿に気づかざるを得ないのである。この後、啄木が歩む「貧しきこと」を敵とする運命は、呪詛さるべきものとして大きく立ちはだかり続ける。

北海道における窮乏する流転の日々は、いやがおうでも自らのおかれた境遇からの言葉が発せられる。「現時の生活に適合して生存へむ事は死よりも何よりも、遙かに遙に至難の事の如く見え候。……所詮私は『生活』に適合する能はざる人間にして、人生の落伍者也、身も心も宇宙の浮浪漢なりといふ感じが、一種の暴風の歓喜を伴ひて私の心を荒らし申候。」(明治四十一年四月二十二日大島経男宛書簡)こうした心の有り様が自堕落な酒色への耽溺を誘発したともいえるが、同時に、啄木は自らの心の内を冷徹に分析もする。「空な人間！空な人間！空な人間だと感じて苦しむ心が、乃ち何とかくして空でなくなりたいと云ふ弱い弱い希望だ、此希望を弱い弱い希望だといふと、モウ實際生きてる気がなくなる、そこで一切の人間が此希望を弱くないものにして下ふ。所謂生活幻像が茲に於いて生ずる、君、凡ての人は皆生活幻像を描いて、それが幻像に過ぎぬといふ事を成るべく知らぬフリをして、一生懸命それに縋って生きてゆく、理想だとか未来だとか云ふのは皆それだ……人間は本来一人ボッチだ、淋しく心細くて溜まらぬから宗教といふ幻像を描いたり、富貴とか権勢とか名譽の幻像を描いたりする。」(明治四十一年二月八日宮崎郁雨宛書簡)

そうした中、啄木自身上京し文学で身を立てるべく舵を切りはじめ。『人は感情の満足を、若き女に求め、家庭に求め、趣味に求めむとす。然れども小生はこれを若き女に求めむには我が心老いたり。これを家庭に求めむには我が性あまりに我儘に過ぐ。

……『創作的な生活』（専念創作に従ふ生活）はかくて現在の私の最大なる希望、唯一の希望に候ひき。』（明治四十一年四月二十二日大島経男宛書簡）啄木にとって、文学は生きるための全てであつたといえよう⁽¹²⁾。

とはいえ、この第三次の上京は、これまでの上京にもまして勝算のない危険な賭の様相を示さざるを得なかつた。啄木は、上京の報告と書き溜めた小説の出版を懇請し森鷗外に手紙を書いてゐる。「中学もロクに卒業せぬ程素養のなき私、殊に詩を書かずなり候ふてより、否、書きえずなり候ふてよりは、その日その日の戦ひにいや更に心荒れて、其昔の稚なかりし不敵の自惚何処へやら、書きたしと思ふ事を書きあぐる生活より外に、聊かにても満足を得る途なし……」（明治四十一年五月七日）と、未来への不安にゆれ動く心の様が見てとれるかのようなのである。それは、朝日新聞社の校正係という経済の点ではこれまで以上に安定した職を得ても変わらない。「このまんまが即ち我々の人生だ！かう考へて僕はゐる。そして我々の人生の底がどこまで深いのか解らぬのに驚く。実際驚く。」（明治四十二年七月九日宮崎郁雨宛書簡）「『生活それ自身がワナだ！』さう思ひ到つた時、僕は急に

この世の中から逃出したかつた、そして遂に逃出することの出来ないワナだと思つた時から、僕は今迄より強くなつた……」病と窮乏の中で目算なくも時を食む啄木は、『一握の砂』の出版、『悲しき玩具』の刊行へと向かいながらも終焉の時をむかえる。

詩や短歌において歌うことは、啄木にとって自分がそこに在ることの確認を意味していた⁽¹³⁾。それゆえ、歌うことは、「両足を地面に喰つ付けてゐて歌ふ詩という事である。実人生と何等の間隔なき心持を以て歌ふ詩といふ事である。珍味乃至御馳走ではなく、我々の日常の食事の香の物の如く、然く我々に『必要』な詩といふ事である。」⁽¹⁴⁾と啄木は語る。病と窮乏の進む中、自分にとつて最後に残された内なる世界で、啄木は歌を詠むのである。啄木のつむぐ一語一語が、彷徨する内なる世界での道しるべとなり、啄木自らを証しするのである⁽¹⁵⁾。

宮崎郁雨とともに『一握の砂』において献辞された金田一京助⁽¹⁶⁾は、啄木の晩年について語っている。啄木の全生涯を知る者の人である金田一は、立ちほだかる運命の数々と絶えることなく格闘する啄木の姿を間近で見続けていたのである。

病床に危坐して火を吐くやうに現代の社会組織を呪詛した口から、涙ぐましく一切の現実を此儘肯定しようとする血の出る様な言葉が響いた⁽¹⁷⁾。

注

- (1) 一説には、明治十八年十月二十七日誕生ともいわれている。本稿では、筑摩書房『啄木全集』一九六八年版の記載にもとづく。
- (2) 平岡敏夫『石川啄木の手紙』大修館書店、一九九六年、十六頁参照。退学の契機となるこの不正行為事件は、欠席の多かった啄木が落第をおそれて特待生狐崎嘉助に頼み、数学の答案を二枚作成してもらい、そのうちの一枚を受け取り自分の答案として提出しようとしたものであった。
- (3) 明治三十五年十二月十九日の日記。以下、啄木の日記よりの引用は、『啄木全集 第五卷、第六卷』筑摩書房、一九六八年より行う。啄木の日記の位置づけは、池田功『啄木日記を読む』新日本出版社、二〇一一年を参照した。また、書簡からの引用は、同全集第七巻より行う。
- (4) 長浜功『石川啄木という生き方』社会評論社、二〇〇九年、五九頁。
- (5) 同上書、六一頁。
- (6) 岩崎之徳「啄木の転機」『文芸読本 石川啄木』山本健吉編、河出書房新社、一九七六年、一五七頁。
- (7) 長浜功、前掲書一七四頁、二五七頁。
- (8) 病に伏す自分への不甲斐なさであろうか。「金はドンドンなくなつた。母の薬代や私の薬代が一日約四十銭弱の割合でかかった。質屋から出して仕立て直しさせた袴と下着とは、たった一晩家

においただけでまた質屋へやられた。」と、自ら抗うことのできない窮乏の様を記している。

- (9) 「……俺も母の死ぬよほど前から毎日三十九度以上の熱が出るが床に就いて居たため同じ家に居ながらろくろく慰めてやることも出来なかった、お前の手紙は死ぬ前の晩についた……お前の送った金は薬代にならずにお香料になった……」と、母親の最期について語っている。

- (10) 土岐は、東雲堂に歌集の表題作成を依頼され、歌稿ノートに記された「歌は私の悲しい玩具」から名づけたと『悲しき玩具』のあとがきで語っている。

- (11) 詩集『あこがれ』が出版されるのは明治三十八年五月であり、啄木が父の住職罷免を知る同年三月の後であるが、所収作品が上京に携えたものをもとにしている点からすると、内容においては転換点前に位置するといえよう。

- (12) 西脇翼『石川啄木悲哀の源泉』同時代社、二〇〇二年、一四六頁。啄木においては、詩歌において歌うことが全てであったのであるが、啄木に限らず資産をもたぬ者の宿命であるかのように、この時代才能の開花が窮乏の代価となる「むじさ」がみられる。「蓄積された資産をもたぬ貧しい日本の知識人が、自我を上げしく貰こうとするとたちまち社会から復讐されて自己の家族を飢えさせねばらぬ……時代の最も深い要求はこのようにしてごく少数の者をむじ道にかりたてるのであるが、かれら

は、そのむごさのなかで自己をつきつめることによって、時代の

- (12) 深い要求をまったく個性的な形で実現したのであった。」(小田切秀雄『啄木全集第六卷』筑摩書房、一九六八年、三八八頁。)

(13) 「僕には、平生意に満たない生活をしてゐるだけに、自己の存在の確認といふ刹那刹那に現はれた『自己』を意識することにもとめなければならぬやうな場合がある、その時に歌を作る……」(明治四十四年一月九日瀬川深宛書簡)。

- (14) 山本健吉編『文芸読本 石川啄木』河出書房新社、一九七六年、二四四頁。啄木においては、詩歌において歌うことが全てであつたのであるが、啄木に限らず資産をもたぬ者の宿命であるかのよう

に、才能の開花が窮乏の代価となるこの時代の「むごさ」がみられる。「蓄積された資産をもたぬ貧しい日本の知識人が、自我を上げしく貰ふことするとたちまち社会から復讐されて自己の家族を飢えさせねばらぬ……時代の最も深い要求はこのようにしてごく少数の者をむごい道にかりたてるのであるが、かれらは、そのむごさのなかで自己をつきつめることによって、時代の深い要求をまったく個性的な形で実現したのであった。」(小田切秀雄『啄木全集第六卷』筑摩書房、一九六八年、三八八頁。)

- (15) 創作における啄木の真摯さを、窪川鶴次郎は、「啄木は、人生に對して決して第三者的ではありえなかつた。どの作品をとつても傍觀的なものはすこしもなかつた。」と指摘する(「作家啄木」『文芸読本 石川啄木』河出書房新社、一九七六年、一〇七

頁)。

- (16) 宮崎郁雨と金田一京助については、西脇巽『石川啄木の友人』同時代社、二〇〇六年を参照。

- (17) 金田一京助『晩年の石川啄木』『啄木全集 第八卷』筑摩書房、一九六八年、四七頁。啄木の最後の一年に對する金田一の評價に

は、批判もある。たとえば、啄木の娘婿となる石川正雄は「金田一氏が現実肯定の一事にのみ拘泥し、啄木のいったもつとも大事な『社会帝国主義』を無視して理解しようとする矛盾も氷解してくる。……所謂不動の境地なる思想は、その死に至るまで毫も変化しなかつたとみるより外ない事である。」と批判する(『啄木全集第八卷』筑摩書房、一九六八年、八五頁、八七頁)。そういった批判に對して、金田一は「私は、生々發展の長い道程を傷つきながら血みどろに続けた不斷の魂の精進を没却して、一つの言葉、一つの姿を物色し來つて固定概念を造る機械的な人の觀方を絶対に排棄する。」反論する(金田一京助、同上書、六十頁)。

(かんの・たかひこ 東海大学文学部教授)